

大学生の学習観の変化に関する研究
専攻別，入試方式別，性別の分析を通して

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
吉武 みどり

1. 問題意識

わが国では，自己の充実等の為に，生涯に渡って学習を続ける人が増えている。

長い学習期間において，人の学習に対する考え方や意識，言い換えると「学習観」は変化するものなのだろうか。それとも，ある特定の時期に形成された学習観を一生維持し続けるのだろうか。

2. 目的

大学生の学習観が，大学教育期間を経て変化するのか，するとすればどのような変化なのかを明らかにすることを主な目的とした。また，専攻，入試方式，性別の3要因が，大学生の学習観の発達の变化にどのような影響を与えているのかについて明らかにすることを目的とした。

3. 方法

【調査対象】R大学3回生，163名。

【調査項目】学習観尺度：9因子49項目から成る学習観尺度(高山,2000)を使用し，5件法で回答を求めた。以下に各因子の内容を示す。「記憶」…機械的に記憶するもの。「主体的探求」…自主的に探求するもの。「生涯学習」…生涯に渡って行うもの。「生涯学習」…日常生活から自然に習得されるもの。「知識の増大」…知識を増加するもの。「成長・向上」…精神的に成長するもの。「応用」…社会生活において役立つもの。「体得・反復」…繰り返し身に付けるもの。「強制・義務」…強制的・受動的なもの。

質問紙の構成：質問紙は次の3部構成であった。

学習観尺度の各項目に対し「大学入試を終えてから大学へ入学するまでの間，あなたは学習に対してどのような考え方や感じ方を持っていました

か？」と尋ねた。学習観尺度の各項目に対し「現在，あなたは学習に対し，どのような考え方や感じ方を持っていますか？」と尋ねた。フェイスシート：学部，入試方式，性別を尋ねた。

4. 結果

学年(新入生,3回生)，専攻(文系,理系)，入試方式(一般入試,その他の入試)，性別(男性,女性)の4要因に関し，3要因の分散分析を3回行った結果，新入生と3回生間で，9つの学習観全てに有意な変化があった。

「記憶」は，一般入試，その他の入試を用いた学生では学年を経て有意に低下した。「体得・反復」は，理系学生とその他の入試を用いた学生では変化はなく，文系学生と一般入試を用いた学生では学年を経て有意に低下した。「強制・義務」は，学年を経て有意に低下した。

一方「主体的探求」，「生涯学習」，「自然な習得」，「成長・向上」は，学年を経て有意に向上した。また「知識の増大」，「応用」は，女性の理系・文系学生，男性の文系学生では変化なく，男性の理系学生では学年を経て有意に向上した。

5. 考察

「記憶」，「体得・反復」，「強制・義務」という，試験あるいは受験勉強の影響によって形成されると見られる否定的な側面を含む学習観が低下し，「主体的探求」，「成長・向上」といった学習を肯定的に捉える学習観が向上したことから，大学という学習環境あるいは学習期間が，大学生の抱く学習観を好転させる働きを担うことが示唆された。